

## 山本有三「女の一生」論

——昭和初期の新聞小説として——

田中俊男

一

小谷野敦は、『恋愛の昭和史』第七章を「女の一生」小説の誕生——岸田國士、山本有三」と題し、戦後の「NHK連続テレビ小説」へ連なるものとして、戦前の「女の一生」ものをたどっている<sup>①</sup>。

小谷野が取り上げる最初の作品は、「年下の中條百合子の『伸子』に刺激されたもの」という、野上弥生子の「真知子」（「改造」中央公論）昭和三年（五年）、ついで岸田國士「由利旗江」（「朝日新聞」昭和四年（五年））である。小谷野は後者の欠点を「観念的」だと指摘し、「これをもつと現実にして、後々まで読み継がれる作品にしたのが、（中略）山本有三の『女の一生』だ」（傍点引用者）と述べる。小谷野の言う

「現実的」とは、ヒロインの生き方やその背景が同時代の社会と接点を持っており、また戦後社会にも通じる普遍性と大衆性があったという指摘だと思われるが、今この部分に傍点をつけて強調したのは、ある作品が「現実的」であるというのはどういうことなのか、合理的に考えてみたいという趣旨ではない。「女の一生」はごく素朴な意味で、同時代の「現実」と関わっている。その有様を、むしろ表層的に素描することに本稿の目的がある。すなわち昭和初期の新聞小説にまつわる現象の一例として、山本有三と「女の一生」をクローズアップするということである。したがって、「現実」という語を繰り返し使うが、それは厳密な概念ではない。その時々で社会やメディアや一般読者、出版戦略など、テキストの外側にあるものを漠然と指す。

「女の一生」は昭和七年一〇月二〇日に「朝日新聞」への連載が始まり、八年六月六日をもって中断した。

有三はその後加筆し、完成版を八年一月に中央公論社から刊行した。中断の理由は有三が共産党関係者へのカンパの疑いから拘留されたことである。この拘留事件がまず「女の一生」の「現実」との因縁を示すものである。有三が昭和初期の社会の「現実」に批判的に関わりとうとする意志を持っていたことは疑えない。その良心や勇気は評価に値する。だが一方で同時代において異なる見方が存在し、「女の一生」と「現実」が多様な関わり方をしてきたこともまた事実である。

回り道になるが、先に戦後、平成の「女の一生」と有三作品について、これも「現実」性に関わるものとして二つの点から概観しておく。まず読書環境である。小谷野は、「後々まで読み継がれる」と述べる一方で、現在の視点から「過去には広く読まれていたが、今では文庫版も品切れなので」と書いている。これは事実である。平成八年開館の三鷹市山本有三記念館が「女の一生」上下を二三年に復刊し、販売したが<sup>(4)</sup>、一般書店で眼に触れるものではない。「女の一生」は忘れられつつある作品である。

ではこれは有三作品全般に言えることなのか。そうではない。一般に普及する頻度の高い文庫本の出版状況を見れば、有三が現代においてどのような作家として生き残っているのかがわかる。平成二五年五月現在

有三の名を冠した文庫本のうち新品で流通しているものは、『路傍の石』『真実一路』『心に太陽を持つ』<sup>(5)</sup>の三冊である。だが記憶に新しいとおり、有三の名は近年メディアを賑わし、小規模ながらブームが起った。それをよく表すのが、新潮社の今世紀になってからの文庫刊行状況である。平成一三年に『米百俵』、平成一四年に『日本少国民文庫 世界名作選一』『日本少国民文庫 世界名作選二』の出版があった<sup>(6)</sup>（平成二五年五月現在、三冊とも新潮社のホームページから消えている）。前者は小泉首相の所信表明演説への引用が、後二者は美智子妃の幼少時の愛読書として紹介されたことがきっかけとなった出版と推測できる。

ブームは意外なところにも波及している。平成一六年栃木県警少年課は「規範意識向上を目指す啓発チラシを作成」する<sup>(7)</sup>。自身は「文部科学省の道徳用の副教材「心のノート」や栃木出身の文豪・山本有三の小説から、思いやりや努力を訴える短文を抜き出し」たものである。一方、「心に太陽を持つ」の題に取られたドイツのフライシュレンの詩が、平成二三年六月、「NHK連続テレビ小説」・「おひさま」で、ヒロインの戦死した兄の好きな作品として朗読された。『米百俵』のその後のエピソードも、ブームのめまぐるしさを語っている。『米百俵』は「小泉ブームに乗って13万6000部とヒットした」が、平成一八年三月に絶版、「ところが、定額給付金の議論に絡んで、この物

語は新聞やテレビで再び脚光を浴び、「平成二〇年一月に再び復刊を果たした」という<sup>6)</sup>。

近年流通した有三の文庫本は以上の六種類（「路傍の石」は偕成社文庫にもある）。端的に言って平成の有三とは、少年犯罪や不況の文字がメディアを賑わせる時代の、今ここにはない規範であり、ノスタルジーである。もちろん一人一人の読者には固有の読書経験が刻まれるはずである。だがメディアに現れた最大公約数的な現象から解釈すると、これが平成の有三の「現実」性だという他ない。この小ブームに呼び返されることのなかった「女の一生」には、平成の今リサイクル可能な「現実」性は発見されなかったということになる。

平成以前の「女の一生」はどうだったのか。戦後の各種文学全集などの収録状況では、「女の一生」は収録される場合とされない場合がある。専門家の「文学」としての価値判断と出版社側の商品としての価値判断がせめぎ合う領域では、代表作に準じるという程度の扱いだったと言える。だがそれは読者の少なさを意味するわけではない。「広く読まれていた」のは事実である。中央公論社は「女の一生」上下をいちちやく昭和二一年に刊行している。昭和二七年八月三日「読売新聞」の「週間ベストセラーズ」は、新潮社版単行本「女の一生」を吉川英治「平家物語」、村上元三「源義経」、小林秀雄「ゴッホの手紙」、カミュ「結婚」など

と並べて取り上げている。昭和三〇年に松竹制作の映画が全国公開されたことも、読者を増やすのに貢献したはずである。また新潮文庫の「女の一生」上（昭和二六年初版）は、有三が八六歳で亡くなった年である昭和四九年には四九刷、昭和六〇年には六七刷を数えている。戦後も長く愛読され、鮮度を保ち続けてきたとは言えるだろう。では、それはどのような鮮度だったのだろうか。

死去の二年後の昭和五一年から新潮社が一二巻の全集を発行した。その第七巻（昭和五一年八月）附録に、小松伸六が「向日性の作家、山本有三」と題して書いている。この文章が当時の「女の一生」の読み方の例を示している興味深い。

小松は「山本有三の文学は「人生いかに生きるか」という永遠の問題意識をもって書かれ」ており、「国民的文学者の代表者」だと述べる（これは有三文学を語る際の定型句である）。その有三文学のうち、小松が大学のドイツ文学科の教室で特に勧めるのが「女の一生」である。「モウパッサンやシュニツラーの「女の一生」もいいが、山本作品はともかく一番面白いからだ。今流行の「未婚の母」「悪徳医師」「政治運動に走る学生」など、カレント・トピックスに対応する問題もここに提起されている」と小松は述べる。小松は「今流行」の中に「女の一生」の鮮度を見出しているのである。学生がどう受け止めたかは不明だが、

ともあれこの時期にはまだ「現実」と接点を持つ作品という見方が存在し得たことは事実だろう。

次に全集などの解説、専門家の研究論文、一般向けの名作紹介などで、「女の一生」について戦後何が語られてきたかを整理しておこう。蓄積は少なくともはない。言及される話題は六つに大別できる。

第一に外国文学である。有三自身がドイツ文学の専門家であり、翻訳を多数行っていることを踏まえて、シュニツラーや作中に引用されるハイネとの関連を解説する。また有三が「女の一生」というタイトルをモーパッサンの邦訳の題名から取ったことから、両作品の比較を行う。これは主として両ヒロイン（ジャンヌ／充子）の違いを消極的／積極的という語で対比し、後者を評価する語り方である。第二に左翼思想である。作品は左翼思想に染まる息子とそれを理解しない母親との関係を描くが、この点についての評価を、限界性／可能性の両面で行うやり方である。その際昭和一二年の中條百合子「山本有三氏の境地」<sup>7)</sup>を重要な資料として引用する。第三に女の生き方である。第二で述べた母の生き方を含むが、ヒロインの恋愛観・職業観を取り上げる。こちらもまた限界性と可能性について言及する。第四に作品の通俗性や手法の拙劣さである。これはむしろ一般向けの名作紹介本などで触れられている<sup>8)</sup>。第五に冒頭でも述べたが、有三が新聞連載中途中で警察に拘束された事件である。これについては高

橋健二が戦後調査を行い、共産党に近い弁護士へ資金提供を行っていたことを明かしている<sup>9)</sup>。第六に女優志賀暁子の堕胎罪裁判である。昭和一一年検事が暁子を非難する論告を行った。その際「女の一生」のヒロイン充子が堕胎をしなかったことを例にあげた。この論告と有三の応答についての言及である。

これら六点のうち、第二、三、五、六は同時代の「現実」性を論じたものである。だが同時代の他の作品や批評との関連づけは幅広く行われてきたわけではない。そこで今まで取り上げられなかった資料を参照しながら、昭和初めの「女の一生」の位置づけと「現実」との関わり方をあらためて描き出してみたい。

## 二

冒頭で紹介したとおり、小谷野は岸田国士「由利旗江」と「女の一生」を接続した。この点の検討から始めたい。そもそも国士と有三はともに戯曲で活躍した後、「朝日新聞」で長編小説に初めて挑戦するという経歴を持っているのだが、読み比べてみると、両作品に共通項が多いことがわかる。いずれもブルジョア階級の豊かな生活ぶり、世間の常識と異なる男女の結合、婦人が職業を持ち経済的に自立すること、父のいない子を産むことを描いている。「由利旗江」は確かに「女の一生」を準備した作品とも見なすことができる。

また注目すべきなのは、両作が外国文学を取り上げ（「由利旗江」はフランス文学）、ハイカラな雰囲気を出している点である。だが国士の使い方に比べ、有三位の方が「現実」との接点を意識しているように見える。両作の比較・対照から判明するポイントはどこである。

有三位がハイネの詩を恋愛（男女の接近）／革命（母と息子の離反）という二通りの使い方で引用したのは、世代・時代の相違を表す効果的な方法として評価されてきた。さらに近年早川正信が高橋健二の著作『ハイネ』（昭和六年六月）への有三位の書き込みを調査し、ハイネと「女の一生」の直接的な関係を明らかにした<sup>100</sup>。これは重要な成果だが、ハイネを有三位が採用した背景には、以下の点を付け加えておくべきだと思われる。

ここで名をあげたいのは転向・出所して間もない林房雄である。林は昭和七年八月号「改造」に「ハイネ・詩人・革命家」という文章を発表している。その中で林はハイネのヨーロッパにおける受容の変化を語り、「詩人または革命家」ではなく、「詩人・革命家」としてのハイネを強調する。続いて「日本文学におけるハイネ理解の歴史」を森鷗外や高山樗牛などの名をあげながらたどり、昭和二年のエポックメイキングとしての中野重治の「理解」を語り、「ハイネはいま、日本においても、プロレタリアートの文化的成長によつて、

忘却と歪曲の中からよみがえりつゝある」と高い調子で述べるのである。

有三位が林の文章を読んだという証拠はない。だが、昭和初めにハイネがまといつた特別な意味に有三位が鈍感であったとは思われない。先述のとおり、有三位作品に外国文学の登場は多い。たとえば前作「風」（昭和五年～六年）<sup>101</sup>でも、コロンタイやブラウニングをあげている。特にコロンタイの小説のヒロインの新しい生き方は議論を巻き起こしており、やはり有三位が同時代の思潮を取り入れていることがわかる。ハイネの引用も、今生きている素材を使うという意図があったはずである。

時代を読もうとする有三位の敏感さと誠実さについてはこれまでも言及されており、それは主として第二の論点の通り、左翼思想への（限界のある）共感として語られてきた。しかしこの点の中條の批評だけが大きく取り上げられすぎてきた嫌いがある。「プロレタリア文学の側から「同伴者作家」の名をもって呼ばれ」<sup>102</sup>た一人である有三位の位置づけを、中條以外の論者からの批判を踏まえ、あらためて確認しておく必要があるだろう。

「新潮」掲載の片岡貢「新聞の連載小説内幕話」<sup>103</sup>を見てみよう。「新聞の連載小説が、新聞の紙数に及ぼす影響は相当大なるもの」だと考える片岡は、「小説の文学的価値よりも商品的価値の方が大である」と

断言する。そして新聞小説作家の選択を「ギヤムブリング」と定義し、新聞社にとっては「本命の馬」を買うことが大事で、「菊池寛、加藤武郎、山本有三氏等の生命が長い所以もそこにある」と述べる。さらに片岡は、「新聞小説を書く人は、必然的にチャアナリストたる訓練が必要」であり、「近頃の新聞小説に於いて、プロレタリア意識を多少とも滲ませた作品を見て、それが何等啓蒙性を有してゐるのではなく、却て既に大衆的となつたものの表現に過ぎない」と語る。有三を新聞小説作家の代表格としてあげており、かつ有三が「プロレタリア意識を多少とも滲ませた作品」を「女の一生」以前から書いていることは周知の事実である。したがって、「既に大衆的となつたものの表現に過ぎない」という批判的見解は有三に向かつていると見なせる。そのような意味で有三は「チャアナリスト」であり、彼の作品に「商品的価値」がある。しかしそれ以上ではない、と片岡は述べているのである。一方杉山平助<sup>104</sup>は、「現代の智識階級の主要なる代弁的作家」という高い評価をまず与える（こうした表現は同時代にも戦後にもよく見られる）。杉山は一見片岡と反対の評価軸を持っているように見える。だが有三作品の特徴を、「一種の軽佻にも近い適応性」、「絶えず転変する走馬燈のやうな現象を、きわめて迅速適確に把握し得るところのチャアナリスト」、「チャアナリズムに適応せんがために、彼が強てなすところの努

力」といった表現で指摘する。こうした文脈から見れば、続いて「彼ほど敏感に、時代の流れに適応して、次々に興つては消えてゆく思想運動を、円滑に受け容れて、しつかりと自分のものにした作家といふものは珍しい」と述べることも、「チャアナリスト」としての評価だと言えるだろう。ほめてゐるのか皮肉を込めてゐるのか微妙な書き方だが、こちらも片岡と同じ枠組みの中で有三をとらえている。「一種の軽佻にも近い適応性」という評語を無視してはならないと思える。木村毅<sup>105</sup>は、朝日新聞連載に「百数十枚の新稿を加へ」て単行本化された有<sup>三</sup>「風」について論じている。「新聞小説——殊にインテリ読者層の多い本誌に載るものとしては、これ以上のものは一寸考へられない」と評価する。そして「努力の作家」である有三の特徴を次のように述べる。「山本氏なら大凡読者の興味を寄せてゐるものなら探偵小説的要素も、共産党的要素も、自分の書齋から手の届く限り（決してそれ以上ではないが）撰取して決行する」。これもまた新聞小説家としての有三を杉山や片岡と同視点で眺めてゐると言えるだろう。彼らの言に従えば、有三は文学者であるよりも「チャアナリスト」であり、彼の生み出す作品は文学的価値よりも「商品的価値」を優先したものである。戦後も有<sup>三</sup>文学の通俗性はしばしば言われるが、このような明快なとらえ方がまとまってなされるのはやはり同時代の言説である。

以上のような有三の扱いは、次の事例からも傍証できるだろう。「女の一生」連載が始まってまもない時期に発表された野上弥生子「若い息子」（昭和七年二月）は、中間階級の夫人とプロレタリア運動に関係した高等学校の息子を取り上げており、題材としては「女の一生」に先行する。この作品への評価の中で大宅壮一は、「今日、非プロレタリア派の作家のほとんどすべてが、大家も中堅も新進も、こぞつて現実の社会から、積極的なテーマを擱むことを意識的に忌避しつつ、ある」<sup>108</sup>と述べている。大宅の視野には「風」その他を書いた有三が入っていない。少なくとも大宅は、有三と野上を違うカテゴリーに属する小説家と見なしている（むろん野上が文学の側である）。

本稿は「女の一生」と有三の位置を、「同伴者作家」よりも「ヂヤアナリズム」の側に寄せて見ようとする立場を取る。これは宮本顕治が論文「同伴者作家」で、「新聞記事的材料の綴り合わせ」によって現実を避けてはならないと批判していることの延長線上にあるものではない<sup>109</sup>。「同伴者作家」と有三の距離を測るのではなく、出版社の経営者と人気作家を兼ね、最も有能な「ヂヤアナリスト」であった菊池寛と有三の近さを論じるためである。

述べてきたように有三に対して新聞（記事的）小説家という否定的な見方が存在する以上、この時代新聞記事を巧みに取り入れながら人気を博した菊池寛を、

有三と並称するのは不思議なことではない。もともと朝日新聞の連載小説の書き手として有三を推薦したのは菊池である<sup>110</sup>。先の片岡の文章にもあるとおり、両者は新聞小説の大家と認められ、菊池と有三の並称・比較は同時代において行われている。現在では二人を並べて論じることは、ほとんど行われていないと思われるが、以下詳述するとおり、二人は伴走しているのである。

「女の一生」に関係する記事を見てみよう。昭和八年四月一日「読売新聞」の世田三郎「男性の悲鳴」を参照する。他紙の連載小説を利用しながら自紙のそのれの人気をおおる手法だが、単なる提灯記事と見過ごすことはできない。「菊池寛の「結婚街道」（本紙）も五十回を突破した、山本有三の「女の一生」（朝日）は百七十回を越えた。既成文壇の両大家の執筆する作として、それぞれに対照の妙がある」と始まる記事は、まず両作の違いを際立てていく。「前者は華やかで明るく、楽しませるが、後者はジミで暗く、考へさせる」、「後者は飽くまでインテリだが、前者はインテリをも含めて大衆向き」。この記事の主眼はその後、共通点を強調する部分である。「何んとこの両大家共、男性を虐待する事よ！だ」と言い、男性登場人物の名をあげ、「何んとまア見すばらしく書かれてゐる事よこれは現代男性の悲鳴と女性の凱歌とを自ら反映してゐるものか！更らに続きを見よう」とたたみかける。こ

ここには両者の一般的な受容のされ方が示されていると見ていいだろう。男性が読んで我が身と「悲鳴」をあげ、女性を読んで我が身と「凱歌」をあげる<sup>(10)</sup>。女性上位が同時代の「現実」性であり、それを「反映」しているという点で、両作家は同じだと言うのである。

再び「読売新聞」だが、昭和一〇年一月、「男性作家は果たして真実の女性を描いてゐるか」という題の連載を行う。登場するのは中條百合子、野上弥生子、長谷川時雨の三人である。前者二人の意見を見ておこう。中條は日本の作家の名を順に数人あげるが、ここで菊池と有三の二人のみを並称する。「不満が残る」としながらも、「菊池寛さん、山本有三氏は現代の女の化粧とか言葉遣ひの描写から進んでタイプにまで迫らうとしてゐる事はよく判ります」と述べる。野上は「何故インテリの真の姿が書けぬか」という見出しの文章で三人の男性作家の名をあげる。そのうち二人が菊池と有三である（もう一人は横光利一）。「菊池さんも書いて書けないのはありますまい」、「山本さんは勇敢にとりあげていらつしやいますね。しかし山本さんだつて「女の一生」をもつと／＼／＼／＼な結び目に触れさせたかつたのでせうが、それが出来なかつた」と言う。

重要なのは菊池・有三両作家の位置づけの近さと女性の関わりである。両者は「真実の女性を描」くことにチャレンジする代表的作家と見なされている。中條・

野上という進歩的な女性観を持つ女性作家がそれを保証している。「ヂヤアナリズム」が「現実」の女を書くとうとはやし立てるとき、その課題に答え得る作家がこの二人なのである。いささか軽薄な物言いすれば、二人は女の「同伴者作家」として期待されている。

### 三

では実際に、同時期連載の「女の一生」と菊池「結婚街道」（読売新聞「昭和八年」）を比較してみよう。両者は相似形を描いている。

「結婚街道」はモデル小説である。日高昭二は『菊池寛を読む』<sup>(11)</sup>で、菊池がいかに新聞を賑わした事件を自らの小説に利用してきたかを検証しているが、日高の言う「明確な戦略」は、「結婚街道」にも当てはまる。昭和八年二月七日の「菊池寛氏は語る」という連載開始前の予告は次のとおりである。「今度の小説の材料は最近、社会問題として新聞雑誌でも盛んに論議され」た「某結婚解消問題をモデルにして見たい」。

この「某結婚解消問題」とは次のような事件である。京大教授の娘・静子が教授の教え子である長岡医学士と結婚式をあげたが、式後夫から自分は童貞ではなく、しかも性病を患ったことがあると告白された。静子はただちに実家に帰り、教授がその後結婚解消の挨拶状を関係先へ配った。新婦側のこの行動に対しては賛否



両論あり、報道は「結婚街道」連載の前年・昭和七年末から始まり、翌八年も続いた。長岡への同情論も強く、華族から結婚申込があったが、「静子嬢に良縁ある迄断る」と述べたという美談も報じられた<sup>20</sup>。

「結婚街道」は二組のカップルの結婚をめぐる悲喜劇を、対照的な性格の二人（後で三人目加わるが、中心は二人）のヒロインを中心に描く。片方のカップルがこの事件をモデルにしているのである。

「結婚街道」と「女の一生」は、いずれも中上層級の同一の女学校出の性格の対照的な二人の女性が登場し、結婚をめぐる騒動が起こる。銀座などの劇場や映画館がしばしば出会いの舞台になり、話題の映画が取り上げられる（「女の一生」は「オーバー・ゼ・ヒル」、「結婚街道」は「帰ってきた恋人」、「女の一生」を獲よ）。また外国文学の名がある（「女の一生」はハイネやゴリキー、「結婚街道」はコロンタイン）。むしろこうした要素は両作だけに言えることではなく、新聞や婦人雑誌の連載小説一般に通じるものであろう。だが主要な男性登場人物の一人を大学教授、別の一人を外交官にしたところまで共通しているのは、見過ごせない。

ここで重要なのは、これらの要素が大正時代から女性ヒロインを描き続けた菊池の得意分野だという点である（外国文学の引用はむしろ有三大の領域だが）。この意味からいえば、人気新聞小説家の菊池に有三大の方

が做っている。志村三代子は次のように指摘している。「新中間層」の女性読者の期待に応えるかのように、菊池の通俗小説は、彼女たちの理想的な生活モデルを提供している。たとえばそれは、帝国ホテル、音楽会、テニス、軽井沢の別荘といった、「新中間層」の女性読者にはまだ手が届かない特権階級の豪華な生活描写であった<sup>21</sup>。「女の一生」には「特権階級の豪華な生活」とまではいかないが、日光、大島、箱根、大磯などへの気楽な旅行も描かれており、ある種の「理想的なモデル」を提示している。そもそも有三大は「生きとし生けるもの」や「風」でこうした「特権階級の豪華な生活描写」を試みていた。しかしそれはブルジョアの退廃を批判的にとらえるものだった。つまり「女の一生」以前の有三大は同じ題材を菊池と反対の方向性において、告発という観点で用いていた。「女の一生」はその傾向は小さい。有三大作品の系列において、特別に菊池寛に近づいた小説だと言える。

有三大は「女の一生」連載直前の予告で、モーパッサンの「女の一生」を引き合いに出した。「生きとし生けるもの」の予告でも紀貫之「古今集序」を持ち出しているが、「女の一生」はより念入りである。しかもヒロインの新しさに関心を引きつけようとしている点に新機軸がある。自信のなさを断りつつも「モーパッサンの書いた女とどれだけ違った女が書けるか」と記しており、意気込みのほどがうかがわれる<sup>22</sup>。だがこ

れもやはり、先に引用した菊池と近い宣伝の手法である。モーパッサンは昭和初期にも大変人気があり<sup>86</sup>、昭和三年に「女の一生」が映画化されている。「女の一生」という題をつけること自体が、「商品的価値」を巧みに計算する「ヂヤアナリスト」的な感覚の産物と言える。しかも「女の一生」を引き合いに出すのは、すでに菊池寛において行われていた。昭和二年三月一日（二〇日夕刊）「報知新聞」の菊池「結婚二重奏」連載予告には、「この一篇は、恐らく氏の為には「ルゴンマツカル叢書」とも「女の一生」とも「ジャン・クリストフ」ともなるべきものでせう」とある。有三角が意識していたかどうかは別として、結果的にこの点においても、有三角は菊池を踏襲しているのである<sup>87</sup>。

ここからは作者の意図を離れるが、単行本の広告にも共通点があり、商品として両作が同じ扱いを受けていることがわかる。「結婚街道」の広告には次のような文句がある<sup>88</sup>。「この小説には古い因習的な女は一人も居ない」、「近代的教養ある、強い意志と明朗な理智を備へた女性」、「近代」といふ過渡期の渦に死にも狂ふ女性の姿こそは、去就に迷ふ全女性への幸福の示唆である」、「若き女性よ、本書を讀みて人生に対する深き「眼」を開け!」。対して「女の一生」は次のとおりである<sup>89</sup>。「環境と闘つて自己の生命を——惹いては周囲のそれをも生かし切らうとする激しい意欲と努力」、「今この新世紀の積極的な「女の一生」が現日

本にいち早く生まれたことを時代精神の先駆とし、最大の誇りを感じる」、「世のすべての女人よ!!この書は、おん身の一生の伴侶である」。いずれも、女の強さや積極性を今の時代の「現実」性として強調しつつ、読者を女性に限定して訴えかけている。強く新しい昭和の女の生き方の「理想的なモデル」を提示する作品だとアピールしているのである（もちろん内容がそれに見合っているかどうかは別問題である。同時代でも先に引用してきた評者や正宗白鳥の厳しい批判があり<sup>90</sup>、一方で河上徹太郎・塩田良平・高沖陽造・板垣直子などの肯定的評価もある<sup>91</sup>）。

このような売り出し方から見れば、商品としての両者の差異は極めて小さい。もちろん両作品の女の生き方の違いを指摘し、現在の視点から有三角の思想性を強調することは可能である。だがその前に、昭和初期において有三角の描く「現実」性が菊池同様新しい女の商品化の中にあつたことを指摘しておく必要がある。述べてきたとおり、有三角がハイネや左翼思想を題材として用いたことも、モーパッサンの名をあげたことも、「現実」との関連付けによつて文芸作品に話題性を与えようとする菊池的な戦略と通じているのである。最後に、「女の一生」が「現実」と直接的な応答を行つた出来事を付け加えておく。相手は当時大衆娯楽として拡大しつつある映画というメディアである。本稿第一章の最後で、第六の点として女優志賀暁子の墮

胎罪裁判をめぐる応答に触れた。これは先行文献では、あくまで「女の一生」に付随する一エピソードとしての扱いだである。しかしもう少し広い意味でとらえる必要がある。ここにも菊池が関わっているからである。菊池と有三は、暁子が墮胎事件でパッシングに遭った際も「女の一生」を介して共闘しているのである。

検事は暁子を非難する論告を行う際、墮胎しない選択をした「女の一生」の充子を引き合いに出した。これに対し有三は慎重に言葉を選びつつではあるが、充子と暁子は置かれた状況が違うという理由で反論し、暁子に同情を寄せる文章を発表した<sup>80</sup>。先行文献では、「あの作は断じて女を鞭打つ革帯ではない」という部分がしばしば引用された。

有三の方は突然巻き込まれる形だった。対して菊池は自ら積極的に暁子の擁護役を買って出ている。「話の肩籠」でこの事件に触れ、更正の機会を与えよと述べる（「文藝春秋」昭和一〇年九月、昭和一二年一月）。さらに昭和一二年菊池原作の映画「美しき鷹」公開の際の広告には、ヒロイン弓子役の暁子の写真に添えて、「志賀暁子さんの更正」と題した文章を書く。菊池は「僕は執筆中に志賀暁子さんとは弓子の様な女ぢやないかしら、と度々考へた」、「不幸人生明暗の岐路につまづきたる志賀暁子の更正を「美しき鷹」に依つて、認めて頂きたい」と述べる<sup>81</sup>。「美しき鷹」は三社の競作でほぼ同時期に映画化されたが、菊池は自らの作品

のヒロインにふさわしい人物として三人の主演女優のうち暁子を特別に推しているのである。またこれに先立って、「志賀暁子は目下新興キネマを休職の形式で謹慎中だが菊池寛、山本有三氏らの取做して大泉に復活し近く主演映画を製作、山本有三氏の「女の一生」が予定されてゐる。なほ監督は静養中の村田実氏ときまつた」<sup>82</sup>という発表があった。結局村田監督は病没し、この企画は実現しなかったが、兩名が協力して暁子の「更正」に深く関与しようとしていたことがわかる。「女の一生」で「鞭打」たれた暁子は、「女の一生」で救われようとしたのである。これもまた女性の商品化・話題性の文脈の中にあり、「女の一生」と「現実」の関わりの中にかに菊池が入り込んでいるのかを知ろうと、見逃すことはできない。ある意味で「女の一生」は、昭和初期の名プロデューサー菊池の戦略に適合する作品だったのである。

(1) 小谷野敦『恋愛の昭和史』（平成一七年三月 文藝春秋）。

(2) 山本有三記念館は、企画展「三人の「女の一生」——ジャンヌと充子とけい——」を平成二三年一〇月から平成二四年二月にかけて行った。

(3) 「路傍の石」の昭和三〇年代から四〇年代の享受状況は、藤井淑禎「高度成長期に愛された本たち」（平成二一年一二月 岩波書店）に詳しい。また

『心に太陽を持って』は、昭和五六年に新潮文庫入り。新潮社ホームページによれば、平成二五年五月現在、「32刷23万4000部」。

(4) 『心に太陽を持って』には二一の短編があるが、元々はこれらも「日本少国民文庫」所収作である。

(5) 「読売新聞」栃木版 平成一六年一月二七日。

(6) 「読売新聞」平成二二年二月一日。

(7) 宮本百合子「山本有三氏の境地」(『文藝』昭和二二年六月)。

(8) 荒正人「葉子、伸子、充子」(昭和二二年六月 労働文化社)、和田芳恵「女性のための名作 人生案内」(昭和三八年五月 創思社)、大野茂男 遠藤晋「近代小説に現われた女性像」(昭和四四年五月 秀英出版)など。

(9) 高橋健二「編集後記」(『山本有三全集第七巻』昭和五一年八月 新潮社)。

(10) 早川正信「山本有三「女の一生」の基本的理念——逆説的視点の超克」(佐々木昭夫編『日本近代文学と西欧』平成九年七月 翰林書房)。

(11) 宜野座菜央見「モダン・ライフと戦争」(平成二五年三月 吉川弘文館) は昭和初期の左翼的傾向を持つ「傾向映画に典型的なレトリック」を、「孤児であるヒロインが女中奉公する資産家の傲り高ぶる生活や慈善・救済を掲げる機関・制度の欺瞞を醜悪な現実として暴露する」ものであり、制作者は「階級

対立という認識を効果的に俗化・単純化してスクリーンで表現し」、「不況と失業で鬱屈した人々に心理的捌け口を提供して人気を博した」と述べる。「孤児」を、資産家の家を飛び出した女性に取り替えれば、有三「風」の物語になる。

(12) 瀬沼茂樹「同伴者作家について」(『国文学 解釈と教材の研究』昭和三四年八月)。

(13) 片岡貢「新聞の連載小説内幕話」(『新潮』昭和八年五月)。「新潮」は昭和八年二月、A・B・C「連載小説の作家と作品」でも有三を取り上げ、「朝日のお抱え作家」と呼び、連載中の「女の一生」を「だらしがなさ過ぎる」と批判し、「山本氏などただ「仕事が入念」といふだけで買はれてゐる作家」と書いている。

(14) 杉山平助「山本有三論」(『文藝』昭和八年一月)。

(15) 木村毅「文藝時評(四) 新聞小説点検 「風」と「ふらんす人形」」(『朝日新聞』昭和七年一月三日)。

(16) 大宅壮一「文藝時評(4)」(『時事新報』昭和七年一月二九日)。

(17) 宮本顕治「同伴者作家」(『思想』昭和六年四月)。引用は『宮本顕治文芸評論選集第一巻』(昭和五五年一月 新日本出版社)。

(18) 山本有三「人間菊池」(『別冊文藝春秋』昭和二三年一〇月)。有三の最初の朝日新聞連載小説「生きと

し生けるもの」(大正一五年)は未完だったが、菊池の文藝春秋が単行本化した。また高橋健二によれば山本は、「波」連載後、朝日新聞社の社友になり、朝日新聞だけに連載小説を書く約束をしていたという(高橋健二「編集後記」『山本有三全集第四巻』昭和五二年一月 新潮社)。

(19) 正宗白鳥の批判には世田と近い部分がある。「女性は消費者で、消費のあと始末はいつも男ときまつてみると、男の方からも不平が出るかも知れない」(正宗白鳥「山本有三論」〔中央公論〕昭和九年一月)。引用は『正宗白鳥全集第二〇巻』昭和五八年一〇月 福武書店)。

(20) 日高昭二『菊池寛を読む』(平成一五年三月 岩波書店)。

(21) 「読売新聞」昭和七年一二月四日。  
(22) 志村三代子「菊池寛の通俗小説と恋愛映画の変容——女性観客と映画界」(岩本憲児編『日本映画史叢書7』平成一九年五月 森話社)。

(23) モーパッサン版「女の一生」との比較を克明に行った最初期のものに名取堯「二つの「女の一生」」(「コトバ」昭和八年八月)がある。また、ジャンヌの弱さ・消極性を批判し、新しい強い女の生き方を求めた早い例としては、坂井りつ子『処女の文がら』(大正一二年六月 大文館書店)がある。坂井は「ジェーンは本当に旧式な消極的な女でしたものね。

日本にはこうしたタイプの女が大半はゐますわ。もつともつと積極的に、愛のない所にも愛を求める努力をする事が必要ですわ」と述べる。

(24) 「女の一生」は大正期の広津和郎による翻訳が有名だが、昭和初期には岩波文庫や新潮文庫でも刊行されている。また『昭和書籍目録 昭和八年版総索引』(编者・東京書籍商組合 引用は昭和六一年四月 ゆまに書房による復刻版)には、単行本として新潮社版「女の一生」(広津和郎訳)、同じく新潮社版「第一期世界文学全集 女の一生」(中村・広津訳)が記載されている(後者は『世界文学全集二〇』のこと)。

読書界におけるモーパッサンの人気の高さは、一〇年から『モーパッサン傑作短篇集』全一〇巻(河出書房)、一一年から『モーパッサン長編小説』全四巻(白水社)が刊行されたことからわかる。モーパッサン全集がすべての翻訳文学全集の中で最大の売れ行きを示したという記事がある(本多顯彰「翻訳文学の現状三」『朝日新聞』昭和一一年二月九日)。また一一年の流行の一つとして、「輸入の方でも、モオパッサン雛、ゲートル雛、ゴウゴリ雛、フロオベル雛、バルザック雛、ジイド雛、等々、何れも相当の勢力をもつてゐる」(荒井十三夫「桃節句雛定め」『月刊文章』昭和一一年三月)と名前があげられている。

(25) もちろん新聞小説で女性の欲望を描こうとし、それを予告で明記するのが山本・菊池だけだったわけではない。昭和四年九月四日「朝日新聞」の岸田國士「由利旗江」の連載予告では、「物語りの主人公は、私の空想で作り上げた一人の女性です。(中略)求めるものを獲なければ生きてゆかれない勇敢な存在です」とあり、やはり欲望に忠実な女性を描くと宣言されている。また「女の一生」の前の「朝日新聞」連載小説である小島政二郎「海燕」予告の「作者の言葉」は、「私はこの小説で、一人の女をとらへて、生活のなかるべき女性が、生活に目覚めて、雄々しく生活の渦巻きの中を乗っ切つて行く状を如実に描いて見たい」(昭和六年二月三〇日)と述べている。しかも「女主人公」を「女ユリシス」と呼んで外国文学と結びつけており、「女の一生」予告はこれと同型である。

(26) 「中央公論」昭和八年一〇月。

(27) 「読売新聞」昭和八年一月四日。

(28) 正宗白鳥 前出。「女の一生」に一定の評価を与えているように見える部分もあるが、全体としては辛辣な表現が多い。

(29) 河上徹太郎「山本有三論」(『日本文学講座13 大正文学篇』昭和九年六月 改造社)。塩田良平「有三小論」(塩田良平『近代日本文学論』昭和一〇年五月 萬上閣)。高沖陽造「山本有三論」(『中央公論』

昭和一三年一月)。板垣直子「現代ヒューマニズム文学」(板垣直子『現代小説論』第一書房 昭和一三年七月)。

(30) 山本有三「検事の論告と「女の一生」」(『朝日新聞』昭和一一年一月一七日〜二〇日)。

(31) 「読売新聞」昭和一二年九月二七日。

(32) 「読売新聞」昭和一二年四月一五日。

\*旧字は新字に改めた。ふりがなは必要と思われるものみに付した。

(島根大学教育学部特任教授)